

図 書 紹 介 ・ New publications

魚の事典. 能勢幸雄監. 能勢幸雄・羽生 功・岩井保・清水 誠編. 1989. 東京堂出版, 522 pp. A5 判. ¥ 5,800.

魚と人間とのかかわりは, 近年, ますます深まりながら多様化し, 魚に関する情報は年々増大してきたが, これに対応できるだけの百科事典はなかなか出版されなかった. 本書では広い分野にわたる項目がよく選定されたうえ, 魚類学や水産学の各分野で活躍している 23 名の研究者により共同執筆されているので, 解説が適確で平易な点で格好な魚の事典である.

さらに, 魚と人間との関係を重視し, 「うおの事典」ではなくて「さかな事典」となるよう編さんされたため, 一般の読者にも親しみやすく, 類書にみられなかった味がある. 必要にせまられて事典を引いたとき, 目的とする用語を読めば, すぐ本を閉じてしまうものだが, 本書に限っては, 目的とする用語の前後にある項目にも自然に目が移る.

この事典では約 1,700 余りの項目が収録されているが, そのうち約 1,200 項目は魚類を始め鯨類, えび・かに類, 軟体類, うに類, なまこ類などの主要種の解説に当てられている. 魚類では日本産はもちろんのこと, 観賞用, 釣用, 食用などの目的で移入された外国種, 増養殖や遠洋漁業によって国外から運び込まれた種類も数多く含まれている. 各種の分類上の位置, 形態特徴, 分布, 生息場, 生活史, 漁法, 利用などが, それぞれの動物の重要度に応じて適切に解説されている. 種名には英名と共に漢字表記がなされており, 学名は原則として省略されている. 魚名の漢字表記は戦後公的に用いられた

かったため, 代表的な種類を除いて多く忘れられていたが, 本事典では原則として一種に一つの表記を用いており, これからの漢字表記に一つの指針を与えるものといえよう.

さらに, 約 500 項目が魚類の分類, 形態, 生理, 生態, 病気, 資源, 漁労, 増養殖, 食品などに関係した学術用語, および釣り, 漁業, 料理などの分野で慣習的に用いられた日常用語が収録されている. 学術用語は基本的なものが選別されており, 初心者や一般の人びとにも理解し易いように解説されている. これぐらいの用語を理解すれば, 魚類学入門の資格があるとみてよからう. 日常用語はそれぞれの社会や業界で古くから言い伝えられたもので, たとえば「鯛の鯛」とか「人魚の財布」などあまり聞きなれない用語も収録されていて興味をそそる.

付録は本文の理解を助けるため本文と別頁立てになっており, 魚の進化と系統, 魚の分類表, 骨格・消化器系などの解剖図, 水産統計図表, 種別単価表, 海流図, 魚肉を始めとする水産動物肉 140 種近くの成分表, 魚の諺と格言, 魚の漢字などが用意されている. このうち「魚の諺と格言」は, 巷間に受けつがれている 252 の諺や格言が当意即妙に解説され, 先人が魚にまつわる自然現象をうまく人生教訓や生きる知恵としたかを偲ばせてくれる. たとえば「鯉を釣ったら竿立てよ」(釣りの格言), 「魚の釜中に遊ぶごとし」(目前の災いに気が付かず安逸をむさぼること) などなかなか楽しい.

巻末には 40 頁を超す和文と欧文の索引が用意され, 利用の便が図られている. (落合 明 Akira Ochiai)

会 員 通 信 ・ News and comments

メガマウス発見さる

Discovery of a Megamouth Shark from Japan

A megamouth shark was discovered in Japan on January 23, 1989. Its body was found stranded on the sandy beach of Hamamatsu City in Shizuoka Prefecture. Some photographs (below) were taken and sent to me, but very unfortunately, the body had been washed away by the waves and lost soon after the discovery, the photographer reported. It was an adult male, estimated more than 4 meters in total length. Although the body was not secured, this is the first record of the megamouth shark from

the western Pacific, and seems to be the fourth record in the world.

とうとうメガマウスが日本で発見されました.

1989 年 1 月 23 日, 静岡県浜松市松島町の天竜川河口から西方約 200 m の砂浜に, 死んで打ち上げられた状態で見つかったものです. しかし, 誠に残念なことに, この個体 (写真) はその後流失してしまったそうです.

このビッグニュースは北海道大学水産学部水産動物学講座を卒業し, 静岡県浜松市の日本総合プラントに勤務されている斉藤 猛氏からもたらされたもので, 同社の



三宅俊明氏と吉成仁志氏が午後 12 時 40 分頃に海岸に巨大なサメが打ち上げられているのを発見、写真を撮り、齊藤氏の所へその写真を持っていったものです。齊藤氏は、いろいろと図鑑で調べたが分からないし、かなり変わったサメなので、知らせた方が学問のためになるかも知れない、と早速連絡してくれたわけです。残念ながら、標本は入手できませんでしたが、写真からハッキリとメガマウスと確認することが出来ます。メガマウスはその名のごとく、極めて大きな口をしています。その他に吻が短くて鈍く、口が体の前端にあって、微小な歯が両顎にきれいに並ぶこと、巨大な舌があること、鰓孔が大きいことなどの特徴を持っています。更に、この

個体は極めて長い交尾器を持つことにより成熟したオスであると判断できます。全長は報告では約 3 m ということですが、写っている人物などから判断して 4 m を越えているのではないかと考えられます。

メガマウスは上に述べたようにサメの中ではかなり変わった風貌をし、少なくとも全長 4.5 m になる大形のサメで、かなり目立つはずですが、信じがたい事にごく最近まで全く知られていませんでした。その発見の歴史を述べておきますと、最初の個体は 13 年程前に偶然捕獲されました。1976 年 11 月 15 日にハワイのオアフ島北東 42 km の沖合で米海軍の調査船がパラシュート型のシーアンカーを使用し、そのシーアンカーにひっ

かかって上がってきたのです。この個体は全長 4.46 m, 体重 750 kg の成熟したオスで、シーアーカーの下ろされていた水深 165 m 付近を泳いでいてロープに絡まってしまったものと考えられています。大口の奇怪なサメがとれたと新聞で報道され、誰ともなくつけられたメガマウスという名前は一躍有名になりました。普通は新種名が学会誌等に公表され、それから徐々に一般の人に知られるようになるのですが、この場合は全く逆で、一般名のメガマウスが先行し、正式に報告されるまでの 7 年間は学名もありませんでした。結局、Taylor, Compagno and Struhsaker (1983) によって新科、新属、新種 Family Megachasmidae, *Megachasma pelagios* と命名され、やっと一人前（一魚前？）と認められるようになりました。現在でも小形のサメの新種はさほど珍しいわけではありませんが、ホホジロザメ、ウバザメ、アオザメなど大形サメ類の殆どは 18~19 世紀にすでに発見され、記載されてしまっています。Lavenberg and Seigel (1985) はメガマウスの発見を Pacific's megamystery と表現していますが、この様に大型で奇怪な形をしたサメが今まで人目に触れず（少なくとも科学者の）、全く知られずにいたのは信じがたいことで、海洋の未知の部分を見せつけられたような気がします。シーラカンスの発見は随分と話題になりましたが、このメガマウスの発見はシーラカンスに匹敵するような魚類学上の発見だと思います。まだほんの数尾の標本しか得られていないメガマウスは、かなりの数の個体が獲られているシーラカンスよりも貴重で未知の魚類であると言えるかも知れません。現在、このハワイのメガマウスはホノルルのビショップ博物館に保管されています。

1976 年の一尾目の発見以降、何時何処で次のメガマウスが見つかるかが興味的になりました。ついに、8 年後の 1984 年 11 月 29 日、カリフォルニア州のサンタカタリーナ島沖合いで 2 匹目が記録されました。水深 38 m の所に仕掛けてあった刺し網にかかり、発見されたときにはまだ生きていたそうです。この個体もハワイの個体と殆ど同じ大きさの成熟したオスで、今はロスアンゼルス自然史博物館に展示されています。私もこの個体を見ましたが、異様な形態にギョッとした事を覚えています。

そして、本年北海道大学の尼岡邦夫氏から南半球のオーストラリア、パースでメガマウスがとれたといううわさが入ってきました。この具体的な情報を捜していたところ、京都大学の中村 泉氏より送られてきたウエスタンオーストラリア博物館の 9 月号のパンフレット (1988) にこのメガマウスの速報が載せられていました。

これによりますと、オーストラリアのメガマウスは生きて海岸に打ち寄せられ、地元の人たちはイルカと勘違いをして海に押し戻したそうです。しかし、その後死んで海岸に打ち上げられ、博物館員にメガマウスと確認されたそうです。1988 年 8 月 18 日の事だったそうで、全長 5 m, 成熟したオスのこの個体はウエスタンオーストラリア博物館に保存されています。

現在、これ以外にはメガマウスの報告を知りませんが、静岡で記録された日本のメガマウスは世界で 4 番目の個体であると思われます。日本近海でもひょっとすると獲れるかも知れないと話していたところでした。

今までの 4 例の記録を見るとメガマウスは少なくともインド洋、太平洋には広く分布しているようです。しかし、その大きさを考えると世界中に分布している可能性が高く、今後第 5、第 6 の個体が各地から報告されることと思います。また、全ての個体が 4.5~5 m の成熟したオスで、しかも冬期に発見されているのは奇妙な一致で、メガマウスの生態の一部を垣間見せているのかもしれない。メスや若魚はどのような形態をしているのでしょうか、生殖方法はどのようなのでしょうか。大変興味深いところです。

最後に、誰にも知られる事なく流れ去ってしまったかも知れないこの貴重なメガマウスの情報と写真をいち早く提供して下さった日本総合プラント (株) の三宅俊明氏、吉成仁志氏および斉藤 猛氏には心から御礼を申し上げます。また、オーストラリアの情報を提供して下さった尼岡邦夫及び中村 泉両氏に感謝致します。

引用文献

- Lavenberg, R.J. and J.A. Seigel. 1985. The Pacific's megamystery—Megamouth. *Terra*, 23(4): 30-31.
 Taylor, L.R., L.J.V. Compagno and P.J. Struhsaker. 1983. Megamouth—A new species, genus, and family of lamnoid shark (*Megachasma pelagios*, Family Megachasmidae) from the Hawaiian Islands. *Proc. Calif. Acad. Sci.*, 43(8): 87-110.
 Western Australian Museum. 1988. International interest in megamouth. *Your Museum*, 1988 (Sept.): 1-4.

(仲谷一宏 Kazuhiro Nakaya)

第 5 回魚類分類談話会について

On the 5th Seminar for Systematic Ichthyology in Maizuru, November 4-6, 1988

京都大学農学部附属水産実験所 (舞鶴市) での第 5 回魚類分類談話会について簡単に経過を報告する。

11月4日(金): 午後から三々五々参加者が集い、最終的には総勢40余名となり、近年にない盛会となった。夕食後フィルムナイトと称して、各自持参したフィールドや職場や研究室の近況を示すスライドで簡単な自己紹介を行った。これはみんなの親睦をはかるうえで大変効果もあり楽しくもあった。

11月5日(土): 午前9時から夕方6時まで、Dr. Noakesの特別講演をはさみ、“日本海をめぐる魚類相”のテーマのもとに研究発表を行ない活発な論議があった。

1. 日本海の魚類相(サバ型魚類を中心に)
中村 泉(京大水実)
2. サクラマス(研究の現状と問題点)
岡崎登志夫(養殖研)
3. 日本海西部沿岸海域におけるトビウオ類の出現状況
増田恵一(兵庫県水産事務所)
4. 対馬浅茅湾の魚類
金山 勉(総合科学)
5. Behavioral genetics of fishes
D. L. Noakes(University of Guelph)
6. ハオコゼ類の卵巣成熟リズム

- 西 源二郎・徳武浩司・今井啓吾(東海大海博)
7. 山陰海岸(但馬)地方で確認されたフリソデウオ科魚類について
高田厚志(日和山水族館)
8. 中新世淡水魚類化石の周日本海的分布
友田淑郎(前国立科博)
9. 金沢市犀川の大桑層(鮮新世末)の耳石群集
大江文雄(愛知県教育センター)
10. 若狭湾の魚類相について
谷 修一(大阪府立門真高校)

発表終了後、午後6時半から懇親会があり、久しぶりに顔を合わせた魚屋達の魚談議はとどまるところを知らぬかの様だった。

11月6日(日): 午前9時から競の始まる、見学にはもって来いの京都府漁連西舞鶴魚市場へ車を連ねてほぼ参加者全員で見学に行った。午後にも残って水産生物標本館の見学や魚類標本調査をする人も数名あった。

“ごり集会”や淡水魚自然史研究会などとの合同開催や来年度以降の本会の夏季開催も検討された。

(中村 泉 Izumi Nakamura・
細谷和海 Kazumi Hosoya)

会 記・Proceedings

1989年度秋季日本魚類学会シンポジウムのお知らせ	休 憩 (10分)	14:35
日 時: 1989年10月7日(土) 10:00-17:30	7. ウミタナゴ科魚類の交尾生態 櫻井 真(九大農)	14:45
場 所: 宮崎大学農学部講義棟 109号室	8. 汀線と流れ藻の仔稚魚の生態 千田哲資(長大水)	15:20
テーマ: 魚類の産卵行動と仔稚魚の生態	9. 陸圏と水圏の間とくに河口域の仔稚魚の動態 木下 泉(西日本科学技術研)	15:55
開会の挨拶 上野輝彌(日本魚類学会会長) 10:00	総合討論	16:30
講 演	座長 千田哲資・四宮明彦・ 桑村哲生・内田詮三	
1. 魚類の授精様式・婚姻形態と子の保護 桑村哲生(中京大教養) 10:05	閉会の挨拶 赤崎正人(宮崎大農)	17:30
2. 板鰓類の繁殖生態と飼育適応度 内田詮三(沖縄記念公園水族館) 10:40		
3. ゴンズイの産卵と保育行動 神田 猛・溝口雅彦(宮崎大水実) 11:15		
昼 食 (60分) 11:50		
4. カワズメ科魚類の繁殖行動と場所利用 柳沢康信(愛媛大理) 12:50		
5. オオニベの産卵と仔稚魚の成長 赤崎正人(宮崎大農)・ 那須 司(宮崎県栽培漁業センター)・ 滝川勇嗣・戸田修一(宮崎大農) 13:25		
6. メバル・カサゴ類の交尾生態 四宮明彦(鹿大水) 14:00		

英文添削の紹介

英文で論文を書くのは大変なことです。英文添削をしてくれる友人や知合いが周囲にいない場合には、会員の皆さんも苦勞しておられることでしょう。特に、論文の場合には専門用語が用いられるため、通常の英文添削では不十分なこともあります。この度、ニュージーランド